

東京新聞

夕刊

中日新聞東京本社
東京都千代田区内幸町二丁目1番4号
〒100-8505 電話 03(6910)2211



放射線

人の役に立つ仕事をしたいと
漠然と考えるようになつたの
は、大学生のときに赤十字語学
奉仕団でボランティアをしたこ
ろからだと思う。そこで出会った橋本祐子^{（音）}
先生は、私の恩師である。

東京五輪後に開かれたパラリンピック
で、通訳が不足していたのを知り、外国语
ができるボランティアを募り、その後、赤
十字語学奉仕団として組織したのが、橋本
先生。当時、日赤で青少年課長をされてい
た。一九六八年には第一回・世界青年の船
の副團長として、若い人たちが海外と交流
する事業にあたつた。七一年には日本人と
して初めて「アンリ・デュナン記章」を受
章している。

常に、はつらつとして明るく、私た
ちはどうも温かく励まされていた。青年の

わが師

船は、当初、若い男女の船上での共同生活
は何かと問題が起つりかねないともいわれ
たが、「私が責任をとる」と言つて押し切つ
た、と日本人から聞いた。

橋本先生のボランティア論は、「人の役
に立ちたい」という気持ちは大事だけれど、
それだけでは十分じゃない。人に提供でき
る知識・技術が伴わない限り、気持ちだけ
ではボランティア活動にはならない」だつ
た。学生時代にボランティアをしていい氣
になつていた私は、自分の甘さを厳しく指
摘された気がした。役に立ちたいという気
持ちを相手に押ししつけるのではなく、自分
に何ができるのかを常に問
い直す。国連機関で仕事を
している今でも、考え続け
ている。（池上 清子／国
連人口基金東京事務所長）



連人口基金東京事務所長